

黒田周悟氏 株式会社黒田工藝 代表取締役社長



黒田周悟氏




タオルは細かい分業によってつくられる。仕上工程のひとつである、タオル生地に捺染（プリント）を施す作業は地味であるが、タオル生地に多種多様な彩りを与える。創業から60年以上にわたり、今治の地で捺染加工業に携わってきた（株）黒田工藝のリーダー・黒田周悟氏が今回の「タオルびと」である。黒田工藝は、「私たちは色の魔術師でありたい」というスローガンを掲げ、タオル用捺染のプロフェッショナルとして、どんな難しい注文も請け負う。地域に根ざし地域のために働く、これが黒田氏の仕事の流儀である。

くろだ・しゅうご ☆ 1950年9月、愛媛県今治市北日吉町生まれ。今治市立今治小学校、今治市立日吉中学校、私立松山聖陵高校をへて、1969年4月に大阪商業大学に入学。大学を卒業後、1972年4月に大阪のタオル専門問屋の山甚タオル（株）で修行を積み、営業・販売の経験を積む。1979年夏に下積み時代を終えて今治に帰り、黒田工藝（株）に入社。専務取締役として実際の経営を任される。1999年に代表取締役社長に就任し、黒田工藝の二代目となる。父親の代から60年以上にわたり産地内分業の捺染（プリント）加工部門を担い、今治タオル工業の発展を支えている。趣味はサッカーで、サッカーをとおして子供たちへの教育指導や地域活性化に向けた活動もおこなっている。

1. 幼少年時代

スポーツが大好きだった少年時代

黒田周悟氏は、1950年9月1日、今治市北日吉町に父・春夫氏と母・千代子氏との間に二人兄弟の長男として生まれた。父親の春夫氏は黒田工藝の創業者であり、今治タオル工業における捺染加工業の発展に貢献した人物である。また、母親の千代子氏は、玉川町出身で四国工芸社  の創業者である羽藤武氏の実の妹にあたり、羽藤氏は黒田氏の叔父にあたる。羽藤氏については後述するが、今治で初めて紋工所を開設した人物である。黒田氏の弟・洋次氏は、大阪芸術大学で学び、現在、黒田工藝の専務取締役として黒田氏を支えている。

黒田氏は、1957年4月に今治市立今治小学校へ入学し、6年間野球に没頭した。野球だけでなく、走るもの速く、スポーツが得意で明るく活発な少年だった。物心付いたときには父親が事業を始めていたため、家に帰ると父親の仕事場が黒田氏の遊び場だった。遊んでいる傍らで、いつも父親や従業員が忙しく作業をしており、タオルに囲まれた環境で黒



父親の春夫氏に負んぶされている写真（上）

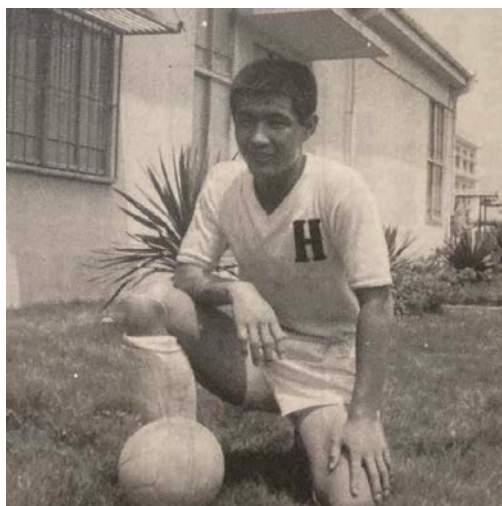
母親の千代子氏と笑っている写真（下）

（黒田春夫『木洩日』141、181頁より引用）

田氏は育った。

当時、父親の事業が繁盛していたかどうかは小学校の黒田氏は知るよしもないが、子供心に裕福な家庭ではなかったと記憶している。そんなある日の面白いエピソードがある。塩田で財を成した同級生の家に遊びにいった際、小学校5年生の黒田氏は晩御飯をご馳走になった。目の前に出てきたのは分厚い鉄板の器に乗った分厚い牛肉のステーキだった。器の脇にはナイフとフォーク。この初体験の感動を自宅に帰って母親に伝えたところ、母親はさっそく黒田氏の感動を再現してくれた。フライパンに鯨の肉のステーキと、その横には包丁とフォークが置いてあった。「これ切って食べ」という母親に、黒田氏は「これじゃないんじゃ」と呆れ顔。なんとも母親の子に対する愛情が伝わってくるエピソードである。


黒田氏は、1963年4月に今治市立今治中学校へ入学した。スポーツ好きの黒田氏は、中学生になっても野球をつづけようと思っていたが、父親の進言でサッカー部に入部した。小学校時代に明けても暮れても野球に夢中だった黒田氏を見兼ねて、父親は「野球して



青春時代をサッカー捧げた黒田氏

（黒田春夫『木洩日』133頁より引用）

たらバカになってしまうから、野球は辞めて何か他のものでもやったらどうか」と黒田氏にアドバイスし、野球から少し距離を置かせた。しかし、野球からサッカーへ球技の種類が変わっても、黒田氏のスポーツ好きにますます磨きがかかった。そして、野球少年からサッカー少年になった黒田氏は、1966年4月に松山市にある私立松山聖陵高等学校へ入学し、本格的にサッカーにとり組んだ。


サッカーへの情熱は現在もつづいており、愛媛県立今治東中等教育学校  のサッカー部で外部コ

ーチ（JFA C級コーチ）として25年以上にわたり後進の指導にあたっている。こうした功績によって、黒田氏は、日本サッカー協会の100周年表彰において「功労表彰（個人部門）」（日本サッカー界において永年にわたり普及や発展に貢献した個人や団体に授与されるもの）を受けている（公益財団法人日本サッカー協会「日本サッカー協会100周年表彰 表彰対象一覧」2021年9月29日、23頁）。


幼少時代を今治で過ごした黒田氏は、高校を卒業後、1969年4月に大阪商業大学に進学し、大阪での生活をスタートさせた。大学進学にあたっては、明治大学、京都産業大学、そして大阪商業大学の3つの選択肢があった。いずれの大学にも足を運び、大学生活を送るうえで適した環境、サッカーをつづけるのに適した環境、卒業後の進路などを考慮した結果、大阪商業大学に決めた。大阪商業大学には学生寮が^{かしはら}檀原市にあったが、あえて一人暮らしを選び、大阪市阿倍野区松虫の辺りにアパートを借りて、初めての下宿生活を経験した。大学時代はサッカー三昧の生活を送っていたが、その傍ら経営学に関する基礎的な知識を学んだ。

2. 修業時代

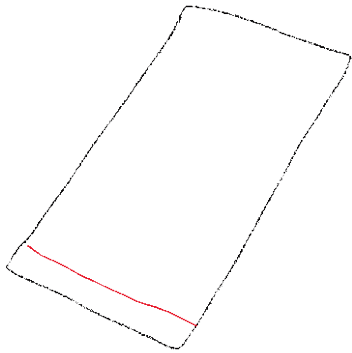
大阪のタオル専門問屋で営業・販売の経験を積む

大阪商業大学卒業後、黒田氏は、1973年4月に山甚タオル(株) に入社した。同社は、山崎甚之助氏によって1950年7月に大阪市西区において設立され（『日本繊維商社名鑑』1970年版、東京信用交換所、1969年）、黒田氏が入社した当時は従業員40名ほどの中規模のタオル専門問屋であった。黒田工藝の主要取引先であった今治の老舗タオルメーカー・田中産業(株)の紹介で入社した経緯があり、いずれは黒田工藝の二代目を継ぐ黒田氏のため、限られた時

間で多くのことを学べる中堅タオル卸問屋の方がいいだろうという、田中産業の配慮であった。



山甚タオルでは、黒田氏は、タオルのみならずさまざまな繊維製品の営業・販売に従事した。営業先は大阪、広島、兵庫、沖縄など西日本の広い範囲に及び、繊維卸問屋や百貨店、なかには大漁旗専用の捺染加工業者とも取引をした。とくに足繁く通った取引先は、兵庫県姫路市にあるむつみ（株）である。月1回の頻度で遠く離れた沖縄にも赴いたが、もちろんニーズがあったからである。

沖縄は独自の贈答文化を持っており、ハレの祝い事には家族・親戚や近隣の人たちに大盤振る舞いする風習がある。その際、タオルが好んで贈られたため、大量の注文が入った。しかも、通常はハ



レの日にはしか贈らないような白地に2本の赤い色のボーダーが入ったタオルが、沖縄では葬式などのケの日も習慣として贈られる。この白地に2本の赤いボーダーのタオルは、かつて大量に生産されていたため、その処理に困ったときに、こうした沖縄の風習が助けてくれた。

タオルケットなどの大判タオルも、誕生日や還暦、米寿などの祝い事になると、1,000枚単位で受注が入ったため、沖縄はタオル専門問屋にとって大きな市場であった。

当時、那覇市で繊維製品の卸問屋を営んでいた上原商事（株）やデパートリウボウ が山甚タオルにとって大口の取引先であった。黒田氏は、各社の担当者とプライベートでも一緒に時間を過ごすことがあった。黒田氏が沖縄出張に行くたびに「クロちゃん、今晚食事に行こうか」と気さくに誘われたり、担当者が今治に遊びに来たり、山甚タオルでの経験は営業ノウハウのみならず地域文化についても幅広い知識を得る貴重な機会となった。（次号につづく）

